

「あ、お兄ちゃん、おかえりなさい」

「悪い、起こしちゃったか？」

「ううん、少し前から起きてたところ。ずっと寝てたから、だいたい調子もいいよ。」

それに、毎日遅くまで

お仕事してきてくれてるから…。

何もできないけれど、せめて

『おかえり』くらいは言いたいもん」

その言葉だけで、今日一日の疲れなんて吹き飛んだ。
両親を亡くし、残された唯一の肉親。
そんな妹のためと思えば
どんな辛い仕事だってこなせた。

それに…今日は『コレ』がある。

「…それは？」

「仕事帰りに異国の行商から
売ってもらった薬だ。何でも
『どんな病気にもかからない体になれる』
だとか…。」

「いや、やっぱりどう考えても怪しいよな。
こんなものを買ってくるなんて
仕事の疲れでどうかしてたのかも…。
せつかく買ってきたものだけど、
間違って飲まないように捨てておくか…」

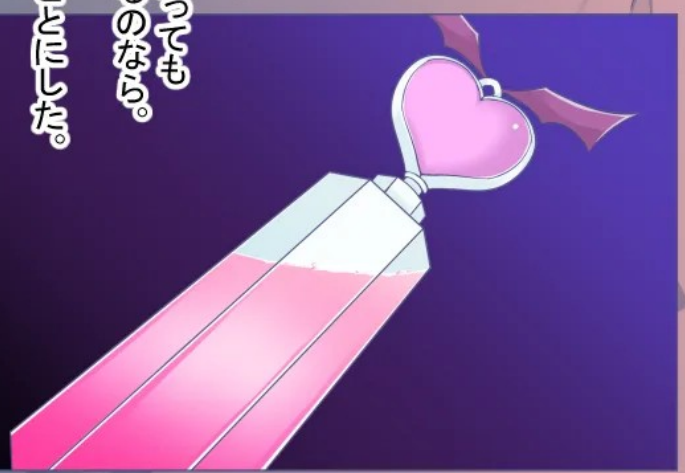
「…待って、お兄ちゃん。
私、そのお薬飲みたい」

「そんなすこいお薬なら、
きつとお兄ちゃんより元気になって、
楽させてあげられるよね？」

普段なら、こんないかにもな代物に
手を出したりしない。

「けど…この薬でどんな医者にかかっても
良くならなかつた妹の体が良くなるのなら。」

そんな一縷の望みに俺たちは継ぐことになった。



「お前、本当に大丈夫か？
顔が赤いし……！」

「ううん……だいじょうぶ。
ちよつと暑いだけ。
それより、早くお仕事行かなきゃ。
遅刻しちゃうよ？」

はぁ……

はぁ……

そう急かされ、半ば追い出される形で家を後にする。
昨日、あの薬を飲んでから妹の様子がおかしい。
ただ、いつもの体調不良とは違う気がした。

頬の紅潮も具合が悪いというよりか……
何というか、すこし色っぽく見えた。

……何を考えているんだ、俺は。

あゝ♡

…俺は何をしているんだ？
妹の顔を…いや、瞳を見た瞬間、
自分の意思とは無関係に
体が動き出した。

そして…犯した。最愛の妹を。


ぞろぞろ♡

はっ♡

「…ごめん、なさいっ…!!
お兄ちゃん…!!
こんなの…ダメだってわかってる。
けど…もう抑えきれなくて…!!
お兄ちゃんを見るたびにアソコがきゅんきゅんして…
ずっと、こうしてほしくてっ♡」

なんで、お前が謝るんだよ？
お前を犯しているのは俺だ…俺の体だ。
拒絶こそすれ、謝罪する必要なんか無い。
それじゃまるで…

—お前が、俺にそうさせてるみたいじゃないか。



「ほらっ♡
もつと腰動かしてよ、おにいちゃん♡
これなら昨日の買い出しついでに
つまみ食いしたお肉屋の
おじさんの方がヨかったよっ?」

あの日以来、毎日のように妹とセックス『させられて』いる。
朝起きて。仕事に行く前に。仕事から帰ってすぐ。
そしてそのまま泥に沈むように眠る毎日。
そして性行為を重ねていくほど、
妹の体調も以前とは見違えるほど良くなった。

：そう、見違えるほど。
性格までもがあの純真で優しかった妹とはまるで別人のように。
俺を気遣う言葉は日に日に少なくなり、性生活の不満ばかり。
そればかりか、そういったことには疎い俺を挑発するようになった。
外にも出歩けるようになったが、出歩く先々で男を誘い
性行為に及んでいることを嬉々として話す。

「あらっ！もうでちゃったの？
まったく早漏なんだから…」

「まあ…いつか。また頑張らせれば。
おにいちゃんはもう、
私の思うままに動いてくれる
『オモチャ』なんだもの…♡」

びくっ

びくっ

どぽぽぽ



「うっわあ♥また出した。
ホントと情けないよねえ、このクソ雑魚チンポ♥
ニンゲンだった頃は頼りになるって
思ってたんだけどなあ...。
こんなへこへこ情けなく腰ふりする姿、
あの時のアタンに見せてあげたら
どんなカオするんだろ♥」

「あれえ？
アタンまだ何もやってないのに
ナカでおっきくなったよう。
まさか最愛の妹に失望される妄想でもして
コーンしちゃったの？」

「あはは♥
どうしようもならんタイだね。
おーらーちやんこ♥」

どぶ

びく

びく



「でも、おにいちゃんの相手もしばらくはおあずけかなあ。こんな租チンじゃ満足もしなくなってきたし♡」

それに…迎えに来てるの。アタシの新しい『仲魔』が。

…そ、おにいちゃんにあの薬を売ったヒトもそうだよ？」

「アッ♡」

「だから、これでおにいちゃんは独りポッチだね♡
あ、でもお仕事は今まで通り頑張ってる？
稼いだお金で風俗でも行って
そのだらしのない租チン鍛えてもらってきよよ。」

もう少し愉しめそうになったら、
だーい好きな妹が遊びにきてアゲルから♡
その時はまたおにいちゃんのカラダ、
アタシの『オナニー』に使わせて、ね？」

















